

(第103回) 歌舞伎観劇会 11月22日(夜の部)

市川海老蔵改め十三代目市川團十郎白猿襲名披露

十一月吉例顔見世大歌舞伎(八代目 市川新之助初舞台)

歌舞伎ファン待望の13代目市川團十郎白猿と8代目市川新之助のダブル襲名披露はコロナに拠り約2年半に亘り延期されて来ましたが、漸く此の程11月吉例顔見世歌舞伎興行として行われる運びとなりました。

演目をご紹介する前に、これから歌舞伎ファンになられる方の為に歌舞伎界独特の表現、言い回し更に今回襲名披露された市川團十郎一家等を簡単にご説明したいと思います。(資料は歌舞伎座発行のパンフレットより抜粋)

現市川團十郎一家概要：今回13代目市川團十郎は昭和52年生まれ、12代目市川海老蔵を経て此の程13代目市川團十郎白猿を襲名。妻は元フリーキャスターだった小林麻央さんですが残念な事に2017年に亡くなりました。一男、一女のお子様がいる長女は市川ぼたん、長男は今回8代目市川新之助を襲名されたかん玄君ですが、母親麻央さんが亡くなられた当時のかん玄君と今回新之助襲名された表情、セリフ回し等此の5年間の成長振りを物語っております。團十郎の屋号である成田家とは團十郎の祖先が甲斐武田家の家臣であったが、成田市に移住し江戸で役者として名声を得た処から、成田家が團十郎一族の屋号となりました。

歌舞伎十八番：江戸時代に7代目團十郎がそれ迄に演じた荒事から18演目を選び鼻筋に配った事が十八番としての始まりで今回の演目の内勧進帳、助六等が入っております。現在でも得意な芸等の事を十八番と称しますが語源は上述の様に歌舞伎の演目から出た言葉です。

にらみ：市川家に伝わる見得であり、独特のポーズ。舞台袖でならされるツケ打ち(バタバタバタと云う音)と共に左手に三宝を持ち、右手を胸の前

で握り客席に向かってカッと目を見開く所作で無病息災の為の邪気払いとされている。

隈取り：初代團十郎の発案に拠るものとされており、地色を塗った後に指で片側をぼかす独特の化粧法で二本隈、一本隈、むきみ等があります。以上市川家に関する歌舞伎用語をご説明しましたが、用語を理解するだけでも歌舞伎に関する興味が増してくると思われまます。

演目説明

1. 矢の根

十八番の演目の一つであり江戸時代の三大仇討ちに入る曾我兄弟の仇討ちを題材にした荒事扮装をした松本幸四郎扮する蘇我五郎時致を主人公とした演目。



曾我五郎は幼い頃に父河津三郎を工藤左衛門佑経に討たれ運命を背負っております。そんな折五郎時到着は夢枕に兄の曾我十郎佑成が現れ現在父の仇工藤佑経の館に幽閉されており五郎時到着に救いを求める。之を受けて五郎時到着は兄十郎を救出すべく、支度をし折り良く通りかかった馬士の畑右衛門に馬を借りるべく頼み込むが断られたので、畑右衛門の馬を強引に借用し積んでいた大根を鞭代わりとして工藤左衛門佑経の館に向けて疾走して行く場面で幕となります。

2. 口上

今月の歌舞伎興行のハイライトとも云うべき演目であり、市川海老蔵の13代市川團十郎白猿襲名披露並びに市川かん玄の八代目市川新之助襲名及び初舞台披露と市川家の親子でダブルの襲名披露です。本来は2年前に行われる予定でしたが、コロナ騒動の為に今回迄延期された経緯があります。



舞台中央に父團十郎白猿と長男新之助が並んで座り、両側には一門のみならず歌舞伎界を代表する役者が勢揃いしそれぞれ襲名披露に対し祝辞を述べました。舞台に並んだ役者は次の通りです。(除く團十郎/新之助)

襲名披露の二人の右側には松本幸四郎白鷗、中村梅玉、坂東玉三郎、尾上菊五郎。又左側には市川左団次、片岡仁左衛門等が並び祝辞表明しその後団十郎白猿が“にらみ”を披露し華やかな襲名披露と襲名挨拶を行いました。

3. 助六由縁の江戸桜

之も市川一門の十八番演目の一つであり、助六

役は勿論團十郎白猿が勤めております。

舞台は吉原仲之町、当時の伊達男と云われた花川戸助六が登場すると花魁達の人気を一身に集めておりましたが、実は助六は曾我五郎時到着が名を借りており源氏の宝刀たる友切丸を探す日々を送っています、兄曾我十郎佑成も白酒売り新兵衛と名を変えて弟五郎を助ける役割。助六の恋人役、揚巻には尾上菊之助又揚巻の妹分として白玉には坂東玉三郎が妍を競う絢爛豪華な江戸の下町風景を醸し出しており更に全編を通じ河東節の三味線、唄が流れ一層豪華さを添えている一代絵巻の舞台です。



なお、今回の歌舞伎観劇会は、アイアン・クラブ会員、ご家族の方々が昼の部に17名、夜の部に26名ご参加されました。

(相田 實・記)